

22 形式の移り変わり

当館では考古学の成果だけではなく、考古学での「考え方」についても、さりげなく展示しています。東エントランスを入ったところにある「ときのギャラリー」もそうですが、「発掘ひろば」にもそうした展示があります。

「はっくつひろば」の左奥、壁に丸い水筒のような須恵器が四つ並んでいます。これは古墳時代の「提瓶」（ていへい）と呼ばれる須恵器で、型式の移り変わりを実感していただくための展示です。

考古学では、型式の移り変わりを考える際にポイントとなる「ルジメント」という考え方があります。もともとは生物学の用語で、日本語では「痕跡器官」となります。例えば、人の尾てい骨のように、昔は機能していても、現在は退化して、痕跡のみとなっている器官の事です。

提瓶はこの「ルジメント」が判りやすいものですが、それにあたるのはどの部分でしょうか？



提瓶の型式変化

肩の部分に注目してください。右から丸い輪が両方についているもの、輪ではなく鉤状の突起が付いているもの、ボタン状になっているもの、何もついてないものと変化しているのが分かります。

これは提げるための紐を結ぶための部分が、その機能が失われることによって、時期が新しくなるにしたがって、退化していくことを示しています。つまり、展示でいうと右から左にかけて、型式が新しくなるということです。

でも、変化の方向としては「提げるという機能が追加されていくという変化（左から右）でもいいのでは？」というツッコミが入りそうです。実は高校の授業で提瓶を使って、ルジメントの説明をしたことがあるのですが、2回の授業とも生徒の圧倒的多数がそういう意見でした。

では、変化の方向を決めるのは何かを再度考えてみます。機能が追加されていく方向に変化するのであれば、紐がひっかけられないボタン状の段階は必要ありませんよね。したがって、型式が変化する方向は右から左ということになるのです。

ルジメントについて、何となくわかっていただけたでしょうか？実際の型式変化については、ルジメントだけではなく、層位学の考え方（古いものが新しいものより深い地層から出土する）なども加味しています。この考え方についても、「発掘ひろば」で紹介していますので、ご確認ください。

ところで、提瓶の変化はどのように起こるのでしょうか？

それについても説明したいのですが、残念ながら紙幅が尽きたようです。館の再開後、学芸員を捕まえて聞いてみてくださいね。お待ちしております。

（埋蔵文化財課 鐵 英記）